



© Yuichiro Kanai

金井大道具・シーニック・アート・スタジオ・ワークショップにて『ドリアン・グレイの肖像』背景画を共同制作中

光る装置、ルーセント幕

シーニック・アート・スタジオ・ニューヨーク(SAS)にて今年7月、「金井大道具・シーニック・アート・スタジオ・ワークショップ」が開催されました。金井大道具社長の金井勇一郎氏が主催し、ニューヨーク在住の舞台美術家、幹子・鈴木・マックアダムス氏が企画するこの研修は、今回で3度目となります。インストラクターであるSAS所属ジェーン・スノー氏の中身の濃い指導のみならず、イリナ・ポルトニャーギニア氏をはじめ、ブロードウェイ劇場の舞台に上がるほぼすべての背景画を描く背景師の話を伺うことのできる希少価値の高い有意義な2週間です。今回の参加者は金井大道具所属の岡田透氏と笹森久美子氏、俳優座劇場所属の牧純子氏、そしてつむら工芸所属の大倉康司氏の4名でした。

研修の軸となっていたルーセント幕は、1枚ものの背景画で舞台奥から光をあてることにより、画に輝きをもたせることを主な目的として作成されます。通常、奥にバウンス幕を吊り、バウンス幕からの反射光によりルーセント幕を照らします。光をどれだけ通すかが重要な点であるため、ルーセント幕には絵具よりも透光度の高い染料が主に使用されます。SASでの研修では、外光や照明器材を利用して制作途中の画に光にあて、舞台上で背景画に照明があたったときの見え方を確認しながらの実地的な訓練でした。

ルーセント幕に関わる照明家が向き合う最大の課題は照射距離の確保と、それが確保できない場合の対応策でしょう。数々のブロードウェイ作品においてルーセント幕に生命を宿す照明デザイナー、ドナルド・ホルダー氏にその秘訣を尋ねてみました。

「ルーセント幕とバウンス幕の理想的な距離は2尺半から3尺。それよりも狭い距離だとバウンス幕に均等な明かりを当てるのが難しく、幕の中央に照度の低い部分が出てしまう。その場合の解決策としていくつか方法がある。一つはルーセント幕の前の上下袖にそれぞれラダーを組み、前からルーセント幕の中央部分をあてる。これによりバウンス幕中央の照度を上げるだけでなく、色と表現の幅を広げ、画に奥行きを持たせることができる。前からの明かりをなじませるために、装置家にはルーセント幕の前に紗幕を吊ることを勧める。この方法の成功例としてはVL2500ウォッシュを使用した『ライオンキング』が挙げられる。次に、ルーセント幕とバウンス幕の間の上下袖に幕とほぼ同じ高さのブームを組み、ソースフォー・バーNSP750wを3尺おきに吊る。これにより照度を上げると同時に光の方向性を持たせることができる。また、バウンス幕をディフュージョンとして使用し、奥から光をあてることもある。『マディソン郡の橋』や『王様と私』の大きな太陽は、この方法を用いて描いた。最後に、ルーセント幕には状況に応じた最大限に明るい器材を選択し、場が許す最大数の器材を仕込む。空は通常地平線が最も明るいので、充分明るい器材を置くことが必須。650wや1000wのT-3サイク・ライトやETCのマルチ・パー・ストリップライト、またはLEDストリップライトを少なくとも2台並べて使用する。ルーセント幕の素材に関して装置家にはライトウェイトの一枚もの漂泊された木綿地か、RPスクリーンを使用するよう勧める。」

なんとも魅力的なルーセント幕ですが、「あくまでも何をどう表現したかが先にあり、技法はその次」と話すのはマックアダムス氏です。スノー氏の「経費と時間を割いて、またライバル会社所属の背景師も招いて、なぜこのような研修を開催し続けるのか」との質問に「日本のためになるからです」とサラリと答えた金井氏から、この研修の意味を学んだように思います。